様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２０９

研究課題名（和文）東大紛争と丸山真男

研究課題名（英文）Maruyama Masao and the University of Tokyo Struggle

研究代表者
清水　靖久（Shimizu, Yasuhisa）

九州大学・比較社会文化研究院・元教授

研究者番号：００１７０９８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：この研究は、戦後日本の思想史のなかで丸山真男の思想を考察すること、そのために1968-69年の東大紛争の実像を解明することをめざした。その研究成果を世に問うために、著書『丸山真男と戦後民主主義』を刊行した。そのなかで、戦後日本で民主主義を説いてきた丸山が、1960年代末の名ばかりの民主主義に苛立つ若者を理解しきらなかったこと、ただ全共闘学生の研究室封鎖を「ナチもしなかった」と言ったのは、1930年代の事実の指摘だったのに、1969年1月の安田講堂鎮圧で意味転換が生じて批判されたことなどを明らかにした。すぐれた知性も行き詰ることがあると論じながら、丸山の思想を批判的に継承することを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
1968-69年の大学紛争は戦後日本の思想史の分岐点であり、そのなかでも東大紛争は重要だったが、学生は何に抗議したのか、安田講堂の鎮圧という収拾のしかたしかなかったのか、なぜあれだけ長引いたのかなど不明のことが多かった。そのなかでも注目されたのが戦後日本で民主主義を説いてきた丸山真男の言動であり、「ナチもしなかった」「概念の解体」「人生は形式です」などの言葉が不可解なまま残されていた。それらのことを解明したこの研究からは、知識人の知性について、学問と大学について、名ばかりの民主主義について、戦後日本の歴史について、多くのことを考えることができる。そこに学術的意義も社会的意義もあるのではないか。

研究成果の概要（英文）：In this study I have considered Maruyama Masao's thought in the history of postwar Japan, and investigated details of the University of Tokyo Struggle in 1968-1969. I published the results of this study as a book 'Maruyama Masao and Postwar Democracy.' In this book I clarified that Maruyama who had advocated democracy in postwar Japan, did not fully understand the young people who were irritated at sham democracy in the late 1960s, and why he argued against students' blockade of professor's offices as "even Nazis did not do that," and so on. Although I concluded that even excellent intellectual may reach an impasse, I tried to inherit critically Maruyama's thought.

研究分野：日本政治思想史

キーワード：丸山真男　東大紛争　戦後民主主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

研究課題「東大紛争と丸山真男」については、前述のように、また「４．研究成果」の記述の通り、未解明のことが多かった。それを解明しようとした。

２．研究の目的

「東大紛争と丸山真男」について未解明のことを解明するのが研究の目的だった。そのことを通じて、戦後日本で民主主義を説くことの意味、たとえば一面では与えられた民主主義はしばしば虚妄として嘲笑されたり漫罵されたりしたし、そうでなくても名ばかりの民主主義になりやすかったが、それでも民主主義を自分たちのものにしようとすることの意味を考えることも研究の目的だった。

３．研究の方法

「東大紛争と丸山真男」について未解明のことを解明する方法として、未知の資料を探し、当時の関係者から聞取ること、既知の資料についても、たとえば丸山の手記「春曙帖」を並べ直して解読することなど、歴史研究として当り前の方法をとった。

４．研究成果

この研究は、2013-2015 年度の科研費の基盤研究(C)「丸山真男と戦後民主主義」で試みた研究をさらに深め、とくに「東大紛争と丸山真男」に焦点を当てるものだった。前の科研費の研究成果を世に問うためにも、科研費の研究成果公開促進費（学術図書）に応募したが、「十分に市販性があるものと思われる」「既に類似の成果が刊行されている。出版社等の企画によって刊行するものではないかと思われる」「出版予定年度に刊行すべき必要性が低い」「独創性又は先駆性がもう少し高いと良い」との各年の審査所見によって、４年続けて採択されなかった。そこでこの科研費の補助事業期間を一年延長し、最後の４年めに著書『丸山真男と戦後民主主義』の執筆編集を進めた。2019 年 11 月に刊行された同書の後半には、「東大紛争と丸山真男」の研究成果のすべてを投入した。とくに同書の「まえがき」では、著者の執筆意図のみか研究成果を集中的に示したので、それを下に引くとともに、そこで言及した表紙案と裏表紙の画像も添える。

丸山真男が第二次世界大戦後の日本の民主主義について考えたことをこれから論じる。1945 年に日本が戦争をやめてから、人々は、焼跡と瓦礫の廃墟のなかから再出発した。過去の歴史を反省し、民主主義をよいこととして、日本社会の民主化をめざした人々がかなりいた。それほど反省しなかった政治家は、米国に従って復興と再軍備などを進めたが、1960年に日米安保条約改定の山場が来た。岸首相が乱暴に国会を動かすのを見た人々が、戦前の日本に戻るのを恐れて国会を取囲んだとき、丸山真男（1914-96 年）は人民主権の発動を見た。本書の表紙（カバー）は、岸首相に抗議した 6 月 18 日の国会前の人々の写真と、抗議概念として民主主義を説いた 7 月 21 日の丸山の写真がともに『エコノミスト』別冊（6009）に載ったのを組合せたが、丸山が戦後、民主主義を求める人々の希望とか価値感とかをよく表現したことを示そうとした。人々が民主主義を自分たちのものにしつつあった 60 年前後、丸山も新たな歩みを始めるが、その多岐な歩みや戦後史の屈折に注目して、本書は考察を進める。

1964 年に戦後の民主主義は虚妄だったかを論じた丸山は、戦後民主主義を代表する学者と見なされるようになった。やがて民主主義が形骸化したもの、嫌悪すべきものに凋落したのは、日大や東大で紛争が拡がったときだった。東大駒場の廃墟には、裏表紙（カバー）のような落書きがあった（浜口タカシ『大学闘争 70 年安保へ』6908）。1969 年 5 月 23 日、ガラスが割れ机が動かされた教室の黒板にペンキで書かれた文字は、「民主平和のきらいは人に全共斗」と読めるが、「民主平和のきらいな人に全共斗をば飲ませたい」と書こうとしたのだろう。80 年前のオッペケペー節（8912）の「権利幸福嫌いな人に自由湯（自由党）をば飲ませたい」をもじったのだろうが、その他者説得の思想とは違って、もともと民主平和の嫌いな人に全共湯を飲ませたのでは、仲間同士のぬくもりしか生じない。そこには異質な他者がいないと丸山真男なら批判しただろうが、民主と平和がそれほど嫌われたのはなぜか。1960 年との落差を見つめることから本書は考察を始めた。

丸山真男と戦後民主主義についてはすでに多くのことが語られ、ほとんど論じつくされたように見える。近年では丸山真男の敗北や憂鬱や間違いを指摘しなければ著書が出版されないのは、丸山論が終ったのだろうか。それは『丸山眞男集』だけ読んで丸山を論じる場合のことであり、考えなければならないことはまだ沢山あるし、調べれば明らかになることは少なくない。丸山は、戦後民主主義の旗手とよく言われるが、一括的概念としての戦後民主主義には批判的だった。しかし戦後民主主義を貶す言説には我慢がならず、「戦後民主主義の<虚妄>の方に賭ける」という不可解な反語を記した。民主主義は否定によって鍛えられると説いたが、戦後民主主義が悪く言われるのは嫌だった。そのように時に矛盾する丸山の思想を内から理解するには、彼自身の問題意識を把握し、彼が何を問題としつづけたかを考えることが欠かせない。根本的には良心の自由を重んじる自由主義者だった丸山が戦後、民主主義に賭けたのはなぜかとか。それを考えることは、解放だったが従属でもあった日本の戦後の矛盾を負った民主主義が、数々の批判を受けながら、しばしば有名無実化しながら、ともかく継承されてきた歴史を知ることになるだろう。

1968-69 年の大学紛争は、戦後日本の思想史の分岐点であり、抗議の声が制圧されるのを見た人々の意識を屈折させた。民主主義をめぐる知性の歴史にも大きな刻印を残したが、その一つとして、丸山真男が全共闘の学生から追及され、知的世界から病気退場したことがある。丸山が代表すると考えられた戦後民主主義も、あるいは漫罵され、あるいは冷笑された。あれは何だったのか。大学紛争では何が争われたのか、なぜ長引いたのか、そもそも学生は何に抗議したのか、わかる人は当時もそれほど多くなかった。とくに東大紛争における丸山は触れにくく、その後も聞くに聞けなかったので、ほとんど誰も立入ろうとしなかった。学生の研究室封鎖に対して「ナチもしなかった」と丸山が言ったというのが語り草だが、言ったか言わなかったかを論じるだけでは十分でなく、丸山が言うはずのないことを言ったとすればなぜか、誰に向かって、どのような歴史的経験にもとづいて言ったかを考える。東大紛争における丸山の思索を論じなければ、日本の戦後民主主義を解明できないし、批判的に継承することもできない。本当は同時代経験をもつ人たちに論じてほしいが、当時中学生だった私が試みる。1969 年に生じた歴史の断層を掘り起せるだろうか。

丸山真男の思想を知るには膨大な著述や回想や丸山研究があるが、東大紛争のことについては、丸山没後刊行の『自己内対話――三冊のノートから』（9802@）で活字化された「春曙帖」くらいしかない。「昭和三六年以降雑記帳」と丸山が扉頁に自筆したこの帳面は、1960 年以前の手帖からの抜書きも少なくないが、60 年代とくに 68-69 年の手記が多く、69 年 2 月からの授業再開の記録には誰もが息を飲んだ。これが刊行された経緯には問題もあるようだし、筆記者が公表するつもりがなかった手記を用いるのはためらわれるが、棺が蔽われたのち、それまで知られてなかった東大紛争における丸山の思索について考えないわけにはいかない。この帳面は、右から左へ順序よく書かれてなく、いつ何に対して書かれたのか実につかみにくい。2009 年に東京女子大学丸山眞男文庫で「春曙帖」の原物が（のち画像が館内限定で）公開されてから、『自己内対話』は難読の文字をよく解読した編集者の労作だが、肝腎な筆記の誤読や編み損じがわずかにあることがわかった。そのことを明らかにしながら、丸山が書いた時間順に並べ替えて「春曙帖」を解明することを試みる。

これから戦後日本で民主主義を説いた丸山の多岐な歩みを思想史的に明らかにする。日本が破滅的な戦争に駆りたてられたのは十分に民主的でなかったからではないかと戦争直後に考えた人々は多かったが、瓦礫の只中での問いと反省を保ち、六〇年安保後も日本社会の民主化をめ

ざしつづけた人々もかなりいた。その一人の丸山の発言としてよく知られた言葉を手がかりに考察を進める。1964 年、占領下の民主主義は虚妄を含むという言説に対して、「戦後民主主義の<虚妄>の方に賭ける」と丸山が言い切ったところから、戦後民主主義という言葉が流布し、毀誉褒貶の的になった（第一章）。64 年に丸山が「永久革命」として民主主義を説いたのは、戦後半年余り迷いに迷って獲得した人民主権の思想の持続だったが、しかも革命的でなく逆説的だった（第二章）。61 年から一年半、米英両国に滞在した丸山は「アメリカはわからない」とのちに語ったが、その背景にはビザ問題だけでなく、戦後日本と米国との不可解な関係があった（第三章と補注）。64 年の丸山は、「他者をその他在において理解する」知性の機能を説いたが、マンハイムが民主的討論を説いた原文を見ないまま、シュミットの要約を受けとめ、やがてレーヴィットを通じて、ヘーゲル的な自己内対話に帰っていった（第四章）。

本書の後半では、東大紛争で丸山が考えたことを論じる。1968 年 12 月に東大法学部研究室を封鎖する学生に「ナチもしなかった」と言ったのは、丸山が言うはずのない言葉として嘲りの的となった（第五章）。69 年 1 月、安田講堂で学生と機動隊が激突した直後、東大紛争で「概念の解体」を痛感したと丸山が語ったのは、シュミットが批判したロマン主義を当時の学生に見たからだった（第六章）。2 月、法学部で授業が再開されたとき、追及する学生に「人生は形式です」と丸山は言ったが、なぜ形式に固執したのだろうか（第七章）。「戦後民主主義ナンセンス」の声が高まるなかで、病床にあった丸山は、全共闘の学生を理解しきらず、戦後民主主義の継承者とは思えなかった（第八章）。そのようにして 1969 年の終りまで論じれば、丸山真男と戦後民主主義についてかなりのことを明らかにできる。敗戦によって民主主義が与えられた戦後日本で民主を説くのは愚かなところがあったが、それゆえ嘲笑され漫罵されたとしても、民主主義を自分たちのものにするのが知性の働かせどころだった。そこに光もあれば闇もあり、継承すべきものもあったことを戦後思想史のなかで論じる。【引用終り】

なお、著書『丸山真男と戦後民主主義』と並ぶ研究成果として、論文「東大紛争大詰めの文学部処分問題と白紙還元説」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第 216 集）がある。1969 年 1 月の安田講堂の鎮圧は、全共闘の学生が安田講堂を封鎖しているのを解除するために機動隊を導入すれば、あれだけの激突になることは予想されて当然のようでも、まさかあれだけ弾圧するとは思わなかった人たちには大きな衝撃であり、歴史の岐路ともなったが、それを避けることはできなかったのかという問いから、東大紛争大詰めの 1968 年 12 月末、加藤執行部が全共闘に最後の話し合いを申し入れた経緯および文学部処分の問題点を論じたのがこの論文であり、加藤執行部は文学部処分の「白紙還元」を提案したという通説を批判してもいる。その論文要旨を下に引く。

東大紛争大詰めの 1968 年 12 月 23 日、加藤一郎総長代行が全学共闘会議に最後の話し合いを申入れ、懸案の文学部処分の「白紙還元」を提案したのに、全共闘は話し合いを拒否したという説がある。事実ではないが、その当否を検討するためにも、文学部の学生がなぜ処分されたのか、その「白紙撤回」を全共闘はなぜ要求しつづけたのか、1969 年 1 月 18,19 日の機動隊導入による安田講堂の攻防は避けられなかったか、1969 年 12 月まで文学部だけ紛争が長引いたのはなぜかを考察する。

東大紛争における文学部処分とは、1967 年 10 月 4 日の文学部協議会の閉会後、文学部学生仲野雅《ただし》が築島裕《ひろし》助教授と揉みあいになり、ネクタイをつかんで暴言を吐いたとして無期停学処分を受けたことである。当時の山本達郎文学部長は、12 月 19 日の評議会で、仲野の行為を複数教官に対する「学生にあるまじき暴言」として誇大に説明して処分を決定し、一月後に事実を修正したが伏せた。1968 年 11 月就任の林健太郎文学部長は、同月上旬の軟禁時以外は、仲野と築島の行為の事実を議論せず、教師への「非礼な行為」という説明を維持した。1969 年 8 月就任の堀米庸三文学部長は、9 月 5 日、仲野処分を消去するとしたが、処分は適法だったと主張しつづけ、築島の先手の暴力という事実を指摘されても軽視した。

この文学部処分は、不在学生が処分された点で事実誤認が明らかになった医学部処分とともに東大紛争の二大争点であり、後者が 1968 年 11 月に取消されたのちは、最大の争点だった。加藤執行部は、12 月 23 日、文学部処分について「処分制度の変更の上に立って再検討する用意がある」と共闘会議に申入れたが、林文学部長らが承認する見込みはなかったし、共闘会議から拒否された。「白紙還元」の提案と言えるものではなかった。【引用終り】

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 清水靖久	４．巻 216
２．論文標題 東大紛争大詰めの文学部処分問題と白紙還元説	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	６．最初と最後の頁 39-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清水靖久	４．巻 1130
２．論文標題 戦後民主主義と丸山眞男	５．発行年 2018年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 76-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 清水靖久	４．巻 24(2)
２．論文標題 永久革命としての民主主義	５．発行年 2017年
３．雑誌名 地球社会統合科学	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 清水靖久	４．巻 9
２．論文標題 民主主義	５．発行年 2016年
３．雑誌名 政治概念の歴史的展開	６．最初と最後の頁 255-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 清水靖久
２．発表標題 日本における民主主義の概念の歴史
３．学会等名 戦後日本思想の総合的研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

〔図書〕　計1件

１．著者名 清水靖久	４．発行年 2019年
２．出版社 北海道大学出版会	５．総ページ数 338
３．書名 丸山真男と戦後民主主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考